

# お茶うけ 第94話

## ノリタケの物語 (3) オールドノリタケの絵柄

デパートの洋食器売場に行くと、ノリタケチャイナ・ブランドのさまざまな絵柄の美しい食器類が並んでいます。(株)ノリタケカンパニーリミテドは、創業期の「森村組」の時代から、他社に先駆けて洋風の絵柄の陶磁器を輸出しました。それは、「竹に雀」など和風の絵柄は最初は珍しがられても、長い間にわたって数多く売れるのは、アメリカ人好みの洋風の絵柄であることが、ニューヨークでの商売を通して分かっていたからです。



前回も書きましたように、明治26年頃に輸出したドレスデン風の「草花散らし模様」の陶磁器はたいへん良く売れました。また、明治30年には、「森村ブラザーズ」に優れたデザイナーの和気松太郎が加わり、アメリカの人びとの嗜好に合った絵柄をデザインして好評を博しました。

この流れのなかで、明治32年「森村組」は、客から好みの陶磁器の予約を受けて製造・販売する「予約注文」システムを本格化することにしました。まず、「森村ブラザーズ」に和気松太郎を主任として意匠圖案部を新設し、陶磁器の絵付けに詳しい絵師をニューヨークに常駐させ、洋食器、水差し、花瓶などのための精巧な絵柄を描かせて、「見本帖(画帖)」を作りました。「見本帖」には、絵師たちが丹精込めて描いた、膨大な数のデザインが集められました。当時のアメリカの陶磁器市場を独占していたのは、ヨーロッパからの非常に高価な輸入品でした。そこに手書きで絵付けをした高級品が一般の人でも購入できる価格で売り出され、しかも好みの絵柄を「見本帖」で選んで注文できるということなので大評判になり、注文が殺到しました。

名古屋市区則武町の「ノリタケの森」にあるクラフトセンターの建物の3階と4階にノリタケミュージアムがあります。3階は企画展示室、4階は世界を魅了した「オールドノリタケ」の品々の常設展示室です。私が4月にクラフトセンターを訪れたときは、3階の企画展示室で「画帖(見本帖)展」(第1期)が開催されていました。展示中の「画帖」は、明治38年から明治43年頃まで使われたもので、色紙(しきし)に美しい絵柄が精巧に描かれていました。多数の色紙をまとめた「画帖」は、折本(おりほん)・巻物のような長い紙をジグザグに折り畳んだ形の(本)の形をしています。折本は左右に長く広げて見ることができるので、客が「画帖」の中の複数の絵柄を見比べながら好みのものを選ぶのに非常に便利な形であると思いました。

4階のノリタケミュージアム常設展示室には、「オールドノリタケ」の名品が並んでいます。「オールドノリタケ」とは、明治20年頃から昭和16年頃までの55年ほどの間に、主にアメリカに輸出されたノリタケ製の高級陶磁器の呼び名です。1970年代になってアメリカで優れたアンティークとして評価が高まってから、日本でも20年ほど前からコレクターの間で人気を呼んでいます。ディナーセットなどの洋食器、大皿、ベース(Vase:花瓶、壺)の表面には、美しくデザインされた草花、鳥獣、風景などが、さまざまな精緻な絵付けの技法を駆使して描かれていました。展示してある一つ一つの作品の素晴らしさに目をみはりました。

それらの作品の中に、リンゴの木の下で種を蒔いている人をデザインしたベースがありました。(製作期間:明治44年~昭和元年)モデルの人物は、アメリカの開拓時代に辺境の地にリンゴ栽培を広めたことから「ジョニー アプルシード(Johanny Appleseed)」と呼ばれた伝説の人です。(本名は「ジョン チャップマン{John Chapman[1774-1857]}」)

私は、「リンゴの種を蒔く人」の図柄が、ジャン=フランソワ・ミレー(1814-1857)の絵画「種を蒔く人」とあまりにも良く似ているので、両者の接点に興味を持ちました。

日本人の絵師が「リンゴの種を蒔く人」の絵柄を描いた筈ですが、この絵柄をミレーの「種を蒔く人」に似せたのは、絵師自らがミレーの絵を手本にして描いたのか、アメリカの人の指定によって描いたのかの、何れかと考えられます。絵師がミレーの絵を知っていたことは、オールドノリタケの作品リストに、ミレーの「種を蒔く人」「落穂拾い」「晩鐘」の絵柄の記録があることから明らかです。

また、当時のアメリカの人びとは、開拓時代の素朴な文化に郷愁を感じていたと言われますので、ミレーの描いた自然と共に生きる農民の姿にも共感を覚えて、アメリカの人がこの図柄を特に指定したこともありえます。

それにしても、当時の交通事情などを考えますと、何故アメリカの人びとが大西洋を隔てたフランスのミレーの絵を見ることができ、親しみを感じていたのか不思議でした。

私は、その疑問を解く鍵を、その翌日に訪れた名古屋ボストン美術館のミレー展(2002年3月16日~9月1日)で見つけました。なんと、現在ボストン美術館には、フランスを除けば世界一の規模の175点ものミレー・コレクションがあるのです。ボストンの画家のW.M. ハントが、ミレーの絵の最初のアメリカ人コレクターでした。ハントは、フランスのバルビゾンに住んでミレーに絵を習っていましたが、1850年にミレーが「種を蒔く人」の絵を展覧会に出品したとき、直ちにその絵を購入しました。そして、ハントからミレーの話聞いたボストンの美術愛好家たちは、まだ母国フランスでは評価の低かったミレーの作品を買い集めたのです。

この事実を知って、私は、アメリカの人びとがミレーの絵に特に親近感を持っていたこと、従ってニューヨークにいたノリタケの絵師たちにとってもミレーの絵が身近であったことの一つを見つけたように思いました。

以上

### 参考文献:

- 『森村市左衛門の無欲の生涯』砂川幸雄著(株)草思社刊 1998年4月1日 初版
- 『製陶王国をきずいた父と子 大倉孫兵衛と大倉和親』砂川幸雄著(株)晶文社刊 2000年7月30日 初版
- 『オールドノリタケの美』井谷善恵著 東洋出版(株)刊 2000年11月18日 第1刷発行
- 『オールドノリタケ』コロナ・ブックス編集部(株)平凡社刊 1997年10月20日 初版 第1刷発行
- 『画帖集』パンフレット 第1期 2002年2月5日~5月12日 第4期まであり。ノリタケの森クラフトセンター3階 ノリタケミュージアム企画展示室
- 『ミレー展』パンフレット 名古屋ボストン美術館 2002年3月16日~9月1日
- 『ミレー展』ボストン美術館蔵 図録 東京・日本橋高島屋 2002年8月9日~9月30日

この文書の著作権は株式会社富士通アドバンスソリューションズが保有します。許可なく複製、転用、販売などの二次利用することは禁じます。雑誌書籍、広告など出版物への掲載にあたっては、お手数ですが、事前にご連絡願います。